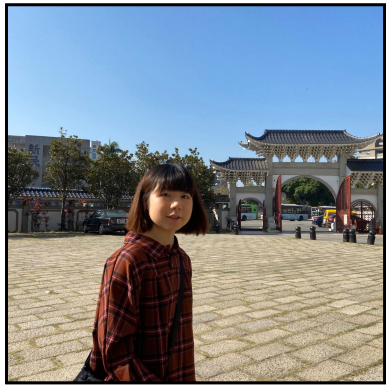
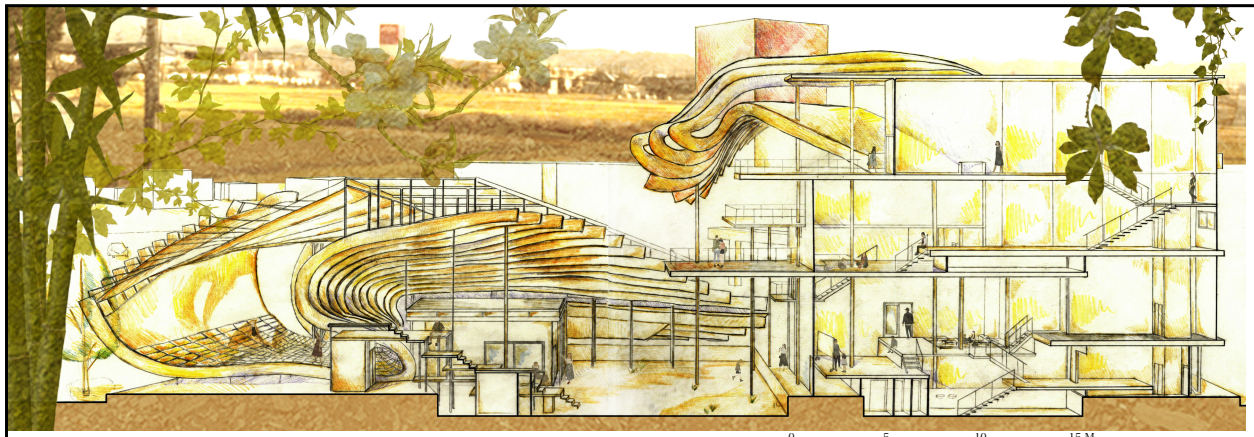


地文化自生

秋田県立大学　都市・建築計画学研究グループ　鈴木かれん　制作期間/4ヶ月　制作費/0円

設計趣旨

土地を肥やすように文化が自生できる空間を育む。
現代において過去が培ってきた文化の恩恵を当たり前のように享受している私たちが，未来にこのような文化の豊かさを残すためにできることはなんだろうか。本設計は，暮らす人々の営みが見えずらくなった現代日本の町に対し，再び人間的な営みが表出し文化を生み出しうる場となるよう働きかける空間の提案である。
日本のありふれた「つまらない」と評価されるような町に，狩野探幽という日本らしい美しさを持った作品の空間性を埋め込んだ。これにより，日本という土地の文脈を汲み取り未来に文化を自生させる空間の実現を試みた。



0　5　10　15 M

1/400断面パース

設計敷地

・自他共に「つまらない」と評価される町空間を持った土地
・町の無個性を演出する商業施設前を敷地として選定

敷地：岩手県奥州市前沢
人口：12，814人
町の面積：72.34㎢

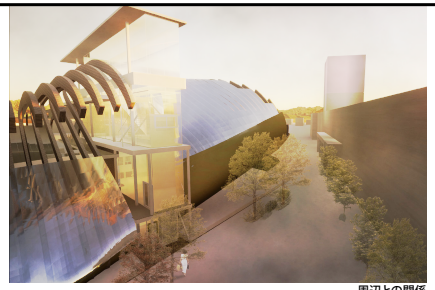
敷地

設計のアプローチ

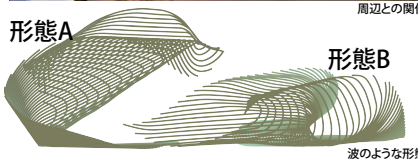
1　狩野探幽作品の空間性/美しさ
　- 5 つの空間性
　-波のような形態
2　人間のスケールで生活を豊かにする機能

問題提起 | 文化を生み出すことのできない町空間

現代の町空間には人間的な営みが表出できない。地域存続の鍵として地域文化の重要性が再認識される一方で，実際の町空間は歴史とも営みとも乖離している。
町は地域の文化的価値を外だけでなく内向きにもアピールしなければならず，そのようにして獲得した個性はもはや「文化」と呼べるものではなく表面的な地域の売り文句のようにしか見えない。文化を町空間に取り戻すために，豊かな空間性を持ち営みが現れる空間が必要である。



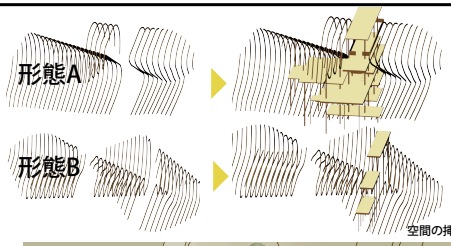
周辺との関係



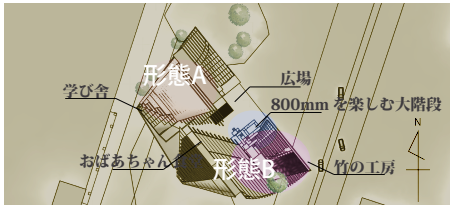
波のような形態

日本らしくも新しい建築空間 | 狩野探幽作品の空間性による両者の両立

「日本の文脈を取り入れつつも新しさを感じる空間」を実現するために狩野探幽の空間性を取り入れた。作品から得られた空間性を，波を思わせる特徴的な形態の中に内包させることで，形態的なインパクトから新しさを，そこに現れる営みや振る舞い，美しさから日本らしさを感じる空間となることを意図している。



空間の挿入

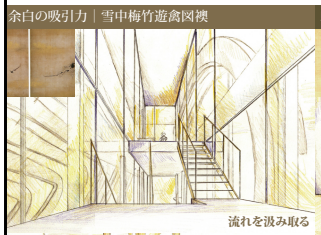


配置図

空間性を通した町の分析

現地のフィールドワークを行うことで，町の中に存在する豊かさと改善すべき点を明らかにし，町にとって空間性がより効果的なものになるようスタディーを重ねた。

前沢スケッチ



余白の吸引力 | 雪中梅竹遊禽図襖

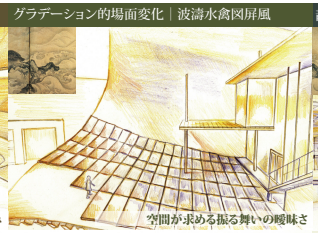
流れを汲み取る

視線の交わり

蛇行 | 波濤群燕図

動線の小さなたゆみ

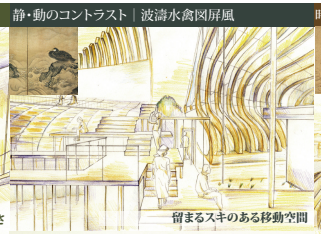
空間全体の大きな蛇行



グラデーション的場面変化 | 波濤水禽図屏風

空間が求める振る舞いの緩味さ

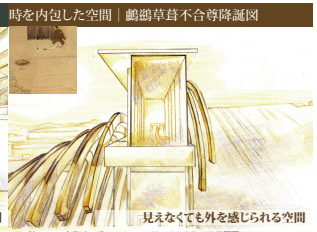
緩やかな高さ変化



静・動のコントラスト | 波濤水禽図屏風

留まるスキのある移動空間

空間そのものを荒波のように



時を内包した空間 | 鶺鴒草蒼不合尊降誕図

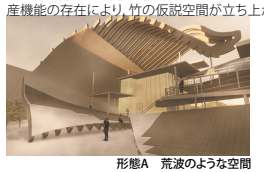
見えなくても外を感じられる空間

営みが外へと溢れ出す

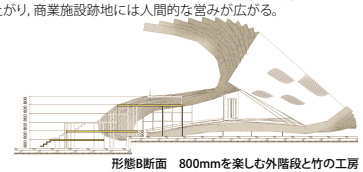
未来像

豊かな空間の広がり

豊かさを持った空間が町の中心に現れたことにより，自然と周辺が作り変えられていく。竹の工房という生産機能の存在により，竹の仮説空間が立ち上がり，商業施設跡地には人間的な営みが広がる。



形態A　荒波のような空間



形態B断面　800mmを楽しむ外階段と竹の工房